

八十木裕幸先生の思い出

上野 勝 広

(スペイン語)

八十木先生に初めてお目にかかったのは、北海道教養部から移籍なさった5年足らず前のことです。その颯爽としたお姿に大学教授らしい風格と気品を覚えたのが、先生の第一印象でした。

残念ながら、個人的に会話をする機会を得ることはほとんどないまま日々は過ぎてゆきました。ただ、同席した会議で先生が次のようにおっしゃったことが、今も鮮明な記憶として残っています。

一つは、教授会で「外国語部の解散決議を撤回していただきたい」とふだん温厚な先生が強い口調できっぱり意見表明なさったこと。東京での新生活のご苦労に加え、当時混迷を深めていた外国語部の状況に対峙され、心身とも大変なストレスを被られていたのは、想像に難くありません。部の将来を案じ、打開の道を真摯に求める声を上げられました。

もう一つは、夏期休暇中の特別補講の打ち合わせ会で、使用教場に話が及ぶと、「7号館はやめてほしい」との先生のご発言。当時7号館は机もいすも老朽化しエアコンもなく、暑い時期は学生も教師も汗だくの授業でしたので、いたく共感しました。

病魔との厳しい戦いを乗り越え、近く大学に復帰なさるとばかり思っていた矢先の訃報を受け、本当にショックでした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。